小指の花びら

　翌日、三杯目の紅茶を頼んでいると悪びれもせずにのんびりと歩いてくる葉子が目に入った。
彼女は仕事以外の、特に私との事にはとことんルーズだ。
ベルベットのジャケットに両手を突っ込んでロングスカートを揺らすその姿は、はるか昔の不良を連想させる。
背が高いから様になっているものの、そろそろ彼女もお年頃なはずだ。
もう少し落ち着いた格好をした方がいいんじゃないかと心配になったが、
コットンのアンサンブルを着た彼女の姿を想像して吹き出してしまった。
　まだしばらく、出来ればこれからもずっと彼女は不遜なままがいい。
スカートの裾でしゃらしゃら揺れている何かを恨めしげに眺めていると、やがてそれが目の前に来た。

「やっぱり三紀男なんだ？」

「そりゃそうでしょう。こんな声で私とは言えないよ」

　私は黒のジーンズにピーコートという色気も何も無い格好だった。
ウィッグなどつけていないし、爪に色も塗っていない。
写真館のアルバイトに行く時と大して変わらなかった。
私にとって男の姿でいる事というのは苦痛でしかないのだ。
おしゃれに気を使うような余裕なんてない。

「ミキと一緒に下着屋さんに行きたいなぁ」

「一人でどうぞ」

「三紀男は冷たいんだよなぁ」

「中身はたいして変わらないはずなんだけどね」

　テーブルの上に置いてあったメニューを葉子に差し出す。
一瞬だけ会話が止まったかと思われたが、彼女はまたぐちぐち言い始めた。

「今日一日喋らないとかどう？　それならいいんじゃない？」

「それで葉子が一日中喋り続けるの？　嫌だねぇ」

「でも三紀男みたいな声してる女の子だって」

「いないよ。……ねぇ」

　私は彼女が持っているメニューを指差しながら言った。

「まずなんか頼もうや」

　葉子が絶句した。
その顔を見て私も言葉を失ってしまった。
そして二人して大笑いしてしまう。
関西弁って便利だ。初めてそう思った。

　お昼ごはんとデザートを平らげてしまうと、ようやく人心地がついた気がした。
空腹というものは知らないうちに体を蝕んでいくから恐ろしい。
しかしこまめに食事を取ると太ってしまうし、厄介なものだ。

　私は時計を見た。一時三十分。そろそろ薬を飲む時間だった。
鞄の中のピルケースからプレマリンを一錠取り出して喉に流し込む。
これで本当に一安心、といったところだろうか。

　プレマリンという名の女性ホルモン経口薬は、普通は病院でしか手に入らない。
しかしインターネットを通じてなら誰でも購入することができる。
正規品とは違って個人輸入というルートを通っているため割高になってしまうのだが、
私のように医者から許可をもらっていない人間はこの方法でしか手に入れることが出来ない。
もちろんきちんと許可をもらうべきなのだろう。でも三年前の私は何度訴えてもその許可をもらうことができなかった。

「まず、ご家族に説明できる事が第一条件です」

　その時点で私の負けが決まっていたのだ。あまりにもあっけなかった。
二十歳を越えればなんとかなると思っていた私にはどうしようもなかった。
親にだけは絶対知られてはいけない。それは昔も今も変わらない決め事だ。
精神科医の診断により「性同一性障害」と認められなければ女性ホルモンの服用は認められないし、
その先の様々な手術及び申請も出来ない。

たとえ無許可で女性ホルモンを使うことが出来ても、
私が望んでいる本当の女性としての体や生き方は得られないのである。
社会の融通のきかなさを恨んだりもしたが、融通が利かないのはむしろ私の方だった。

「どうせ手に入らないのならあきらめればいい」

　そう思う事が出来ないから、私は別の諦め方を選ぶ事にした。
マウスクリック、かちり。それだけでプレマリンは手に入る。
私は男としての人生を諦め、女としての人生も諦めた。
　しかし私にとってはそれで十分だったのだ。
男でも女でもないものになってしまっても、男でしかないことよりははるかにましだ。

　そんな私に対して綾姉は何も言わない。
薬を飲んでいるところは何度か見られているが、だからと言って何かを聞かれたりすることはなかった。
やってしまったものは仕方ないと思っているのかもしれない。

　そういえば、と思って私は葉子に聞いてみた。

「ねえ、潤くんの写真ってみたことある？」

「なに？　唐突ね」

「岩崎さんが撮る子供の写真って、どんなのかなって思って」

　今は写真館の店主として家族写真などを撮っている岩崎さんだが、
数年前まではプロの世界で働いていた写真家だ。
私も写真屋の端くれ(アルバイトだけど)として、彼がプライベートでどんな写真を撮るのか気になっていた。

「本人に見せてもらえばいいじゃない」

「まぁそう言わず。見たの？　見てないの？」

　葉子は「そうねぇ」と言いながらコーヒーを一口すすった。

「普通よ。すんごく普通」

　普通って何？　と綾姉みたいにつっこみたくなったが、なんとかそれを堪える。

「たぶん美晴が撮っても似たようなものなんじゃない？」

　篠田美晴というのは私と一緒に働いている写真家志望の女の人のことだ。
確か葉子と同い年だったはずである。
写真館で七五三の前撮りをする時なんかは、子供を笑わせたり、ちょっと怒らせたりして
なかなかいい写真を撮ってくれるけれど、だからと言って駆け出しの彼女と岩崎さんが同じような
写真を撮るとはどうしても思えなかった。

「それは美晴さんがすごいってこと？」

　思わずそんな風に聞き返してしまう。葉子は「まさか」と手を振った。

「岩崎さんはね、風景写真はそりゃ巧いよ。けど人を撮ると、何ていうのかなぁ、ありきたりな構図なの。
ベタなグラビア写真集みたい。あ、あんた信用してないね」

　そりゃ疑いたくもなる。
私は岩崎さんが撮ったという昔の写真集を見て、鳥肌が立つほど感動したのだ。
太陽の光で淡く色付いた白の砂浜、そこから海に沿うように湾曲したヤシの木が伸びていた。
空の蒼、ヤシの緑、そして海の蒼。
自然が作り出した希少な美しさを見事に切り取ったあの人が、
人の世界ではありきたりなものしか撮れないなんて、信じられない。

「ミキはもっとあの人の写真を知るべきね」

「ずばっと斬られたなぁ」

「茶化してんじゃないのよ。あんたが知らなきゃ源さんも張り合いがないわ」

「なんで僕が岩崎さんと張り合うのさ」

　葉子は何かを考えるようにこめかみを撫で、それから自分の鞄から二枚の写真を取り出した。
二枚とも全く同じように葉子が写っている写真だが、片方は色の諧調が飛んでいるところがあっ

て
いかにも素人くさい写真であるのに対し、もう片方は柔らかな春の日差しを浴びてやさしく微笑んだ
葉子の写真だった。
　私はこれを見たことがあるような気がする。

「こっちが葉子の後輩が撮った写真。こっちはそれを補正した岩崎さんの写真。それくらい僕にも分かるよ」

　彼女は「そうね」と言ってからもう一枚写真を出した。
岩崎さんの方と比べると、顔が青白く、空気もどことなく冷たい。それで私はやっと気付いた。

「これ、僕が補正した写真じゃないか」

「そう、私は一番それが好き」

　この写真を葉子に褒められたからといって私は手放しで喜ぶことは出来なかった。
なぜならそれは好みの問題でしかないからだ。
クールな葉子が好きな人がいれば、やさしい葉子が好きな人もいる。
私は彼女の不遜な感じが好きだ。
　宝石を隠し持っているのにそれを人には見せず、宝石なんていらないね、と鼻で笑う。
私はそんな葉子の特徴を写真に込めただけなのだ。

「僕は葉子の好みを知ってるから」

「それでも、私はそれを選んだのよ？」

　葉子独特の言い回しに私は言葉をなくした。
もう「まさか」とは思えない。
　岩崎源次という人は、いちいち写真の補正を頼みに来る客がつくほど、いい腕を持った写真家なのだ。
そんな人を相手に、たった一度でも勝てたということが私を震えさせた。
　気持ちよかった。
　岩崎さんに勝ちたいと思ったことは無かったが、自分が良いと思っていた以上のものを作ったと感じられるのは、
この上ない贅沢だと思った。

「ありがとう」

　するりとお礼の言葉が出てしまい、私はあわててしまう。
葉子はようやくにっこりと微笑んでくれた。

「三紀男はいいセンス持ってるよ。だからもっと頑張って頂戴」

　そんな嬉しいことを言われて、割り勘にしようなどと言えるはずがない。
私はしてやられた、と思いながら伝票を取り上げた。

　目的地は代官山アドレスだ！　とメールで言っていた葉子だが、思っていたよりカフェに長居してしまったため
(彼女が遅れてきたのが最大の原因だと思うのだが)、私たちは新宿をぶらぶらしていた。

トーコにひどい事を言ったであろうマルイのショップを冷やかしに行こうかとも思ったが、
相手の名前も知らないのに行ってもしょうがないと思い直してやめた。

私は大きなデパートが好きだ。色々なものが丁寧に飾られていて素敵だと思う。
しかし葉子は大きい道を一本入った所にあるような店が好きだ。
お店の人とあーだこーだ情報を交換し合って、自分が本当に欲しいものを探したいのだと言う。

「そんなにはっきりと『自分はこれが欲しい』ってわかるの？」

　私がそう聞くと、葉子は鞄から雑誌を取り出した。
彼女が作った雑誌ではなく、ちょっと敷居が高めのファッション誌だった。

「例えばこれの黒とか、こっちのボルドー、の安いやつ」

　そう言って指差す洋服の指定された配色は、確かに彼女に似合っているような気がした。
彼女は自分の見せ方をよく分かっているようだった。

「ミキにはこんなのとか、良さそう」

　葉子はデパートの店内にディスプレイされていた洋服を指差した。
春物のベージュのワンピースだった。
肩の部分がパフスリーブになっていたり、ミニ丈のバルーンスカートの裾がくしゅっとタイトになっていたりと、

テクニカルだが洗練されたデザインの服だ。
　値段を見ようとしたが値札が無い。
嫌な予感がしてショーウインドウを見上げると「ＹＳＬ」の文字がどーんと見えた。

「買えるわけないじゃん」

「だから似たようなものを探すのよ」

　ああ、なるほど。と思った。欲しいものが手に入らないとき、私たちは代わりのもので満足しようとする。
それはたとえば私がつけるシリコンパッドだ。
　にせものだとわかっていたって、心持ちしだいでそれは本物に化ける。
胸をじっと見られればどきどきするし、触れられればびっくりする。
演じている自分を忘れて本物になってしまうこと、もしくはそれが本物を超えてしまうこと、
そんなことが感じられる私たちの体はいたいけで、尊い。

「僕には探そうという努力が足りないのかな」

「どうだろ？　借金してでもあれを買うっていうのも格好いいよね」

　そんなことを言いながら私たちはタイ料理の店に入った。
私も葉子も辛いものが好きというわけではないけれど、
癖のあるタイ料理のスパイスにすっかりはまってしまっている。
　泣きながら食べるトムヤンクンのおいしさはちょっと説明できない。
料理の辛さに水が欲しくなるが、それを我慢してまたひとくち食べる。
やはり辛いのでまた食べる。
辛味の奥にある旨みが私たちの満足感を刺激し、舌の痛みすら快楽にさせてしまう。

あっという間にデザートまで平らげた私たちは大きく息を吐いた。

「めいいっぱい犯してやった感じ」

　葉子の不謹慎な発言に思わず噴出しそうになる。

「そんな感じしない？」

　私は首を振った。

「どっちかというと僕は逆かな」

「ああ、それもいいわねえ」

　うっとりとした表情のまま、葉子はもう一度「ねぇ」と続けた。

「ミキもそうなの？」

「……そりゃまぁ、そうかな」

　それを聞くと葉子は嬉しそうに頷いた。
なんとなく押されているような気がしたので私も彼女に聞き返した。

「葉子ってさ、なんでミキにこだわるの？」

　葉子は少し考えてから、あっさり答えた。

「うーん、好きな人に我慢して欲しくないから」

　私は少し間を置いてから、左を見て、右を見た。
周囲に変わった様子は無い。
葉子が言ったことは別に変な事じゃないようだ。
改めて彼女の方を見ると、してやったりという風に私を指差している。

「お前は何が言いたいの？」

「ほんとのことよ。自分が好きだと思う人が辛そうな顔をしてるのは見てられない」

　それならはじめからそう言えばいいのに。
そう思いながらも、私はあまり悪い気はしなかった。友達に好きだといわれるのはいいことだ。
心が温かくなる。そして自分のことも少し好きになれる。

「ごめん。心配させた」

「心配っていうか、同情かな。やだよね、そういうの」

　私は何も言い返せなくて黙ってしまった。
葉子は空になったティーカップを軽く持ち上げて「おかわり」と私に言う。
私に言われてもおかわりは出てこないので、私が店員を呼んで彼女のおかわりを注文した。

「好きな人が辛い思いをして男の格好をしているのに、ばっちり紳士的な行動をとらせるわけだきみは」

「だってこの場合しかたないじゃなーい」

　悪びれることなく言い切る葉子の声を聞いて、私も彼女も笑った。
そして、もし、と思ってしまった。
　もし、私が三年前に葉子と出会っていたら、私は女性ホルモンに手を出さなかったかもしれない。
たとえ男の格好をしていてもこんな風に笑えるのなら、私の人生は薬に頼るほど暗いものにはならなかったんじゃないだろうか。

　そんな事を考えてから、違うなぁ、と取り消した。
私は鞄の中にある錠剤を思い浮かべる。
あれがなければ、私は葉子と笑いあう余裕すら生まれなかったはずだ。
　男の人生に決別して捨て身になれたからこそ、東京へ来ることができた。
だから葉子にも出会うことが出来た。たぶんそうなのだろう。

　私と葉子の目が合った。
すると彼女は思い出したように前の話題を引っ張ってきて、突然謝った。

「でも私もごめんね。私に三紀男の本当の気持ちなんてわかんないもん。だってあんた、何にも言わないから」

　彼女の口調が徐々に重くなっていく。表情も冷たさを増し、その眉間にはぎゅっと皺が寄せられた。

「悔しいよ、あんたが女になれないなんて」

　その言葉を聞いて、私は泣きそうになってしまった。
それは社会に対して言った言葉ではなかった。
まずいなぁ、と思う。
　どうして彼女の言葉はこんなにも私に届いてしまうのだろうか。

そして私はどうしてそんな風に何かを伝えることが出来ないのだろうか。
私は動き出す口を止められそうになかった。

「僕は、きっと、自分を守っているんだ」

　つばを飲み込み、息を吸い、目線をそらした。だめだ、このままでは泣いてしまう。

「綾姉にも言われたんだ。でもどうすることもできない。どうすればいいのかわからない。嫌われたくないんだ。
だから好きになってもらいたいんだ。でも、うぃ」

　葉子が僕の頬をつねった。涙がこぼれて彼女の指に落ちる。

「くしゃくしゃの顔」

「……かわいくないだろ」

「かわいいよ」

　何がなんだかわからなかったが、葉子は嬉しそうだった。
そんな風になってしまったのでやはり割り勘にしようとは言えず、またしても私は伝票を取り上げた。